資料1

病院の役割と今後について

病院名：市立福知山市民病院

①自施設の現状及び課題

当院は一般病床340床(うち回復期リハ病床44床)、結核病床10床、感染症病床4床、合計354床の病床を有する地域の中核病院である。結核病床の平成29年度の利用率は8.2%という状況で、この数値が示すように結核患者は非常に少ない現状である。そこで結核病床を必要数の3床程度とし、結核患者が発生した場合には感染症病床で治療する運用に変更することを検討している。このことについては現在京都府と協議中である。

病床数（30．4．1）

合計	一般					療養			精神	結核	感染症
	小計	うち 回復期リハ	うち 地域包括ケア	うち 障害者施設	うち 緩和ケア	小計	うち 回復期リハ	うち 介護療養			
354	340	44	0	0	0	0	0	0	0	10	4

病床機能（平成29年度報告分）

全体	高度急性期	急性期	回復期	慢性期
340	40	256	44	0

②病病連携、病診連携、医療介護連携等の取組及び課題

他医療機関との連携については、地域医療連携室を設置して積極的に取り組んでいる。地域の先生方に「登録医」になっていただいたり、逆紹介した患者に「共同診察カード」を発行するなど、連携して患者さんを診察する仕組みを作っている。しかしながら、直接当院を受診される患者が多く、他医療機関からの紹介患者はまだまだ少ないのが現状である。

また、介護施設との連携もMSWを中心に積極的に行っており、施設からの受け入れ、施設への退院もスムーズに行っている。

③地域において今後担う役割

在宅医療の提供が必要であると考えている。入退院を頻回に繰り返すような高齢者、抗がん剤を使用している患者など治療困難症例については、地域に戻すには大きな問題を抱えている。従って一部症例に限って訪問診療を充実させていく予定である。また、家庭での生活がよりスムーズに行えるよう訪問リハビリを積極的に行う。さらに、今後訪問看護の必要性も重要であると考えており、訪問看護ステーションの設置について検討を進めていく。

④今後の展望

高度急性期病床、急性期病床を中心とした病症機能とし、回復期リハ病棟の有効な活用を図りながら、福知山地域における基幹的総合病院としての機能を維持していく。

病院の役割と今後について

病院名：市立福知山市民病院大江分院

①自施設の現状及び課題

当院は一般病床44床、療養病床28床、合計72床の病床を運用している。分院開院から3年半が経過するが、一般病床の病床利用率が低下している現状である。当院は本院からの転院を受け入れているが、本年に入り本院の病床利用率の低下に伴い転院が減っており、併せて当院独自の入院も減っている状況にある。また、大江地域の人口動態をみると、年間100人程度ずつ減少していくことが予測されている。このような状況の中、今後現状の病床を維持していくことは困難であると考えられ、一部の病床を介護医療院も視野に入れた病床機能転換の考慮が必要であると考えている。

病床数（30．4．1）

合計	一般					療養			精神	結核	感染症
	小計	うち 回復期リハ	うち 地域包括ケア	うち 障害者施設	うち 緩和ケア	小計	うち 回復期リハ	うち 介護療養			
72	44	0	0	0	0	28	0	0	0	0	0

病床機能（平成29年度報告分）

全体	高度 急性期	急性期	回復期	慢性期
72	0	44		28

②病病連携、病診連携、医療介護連携等の取組及び課題

本院との連携強化を図り、入院患者の確保に取り組んでいるが、本院の入院患者数の動向に左右される現状である。今後は他病院との連携体制の強化も必要であると考えている。
大江地域の診療所と連携し、24時間往診が可能な体制で病状の急変時にも対応している。

③地域において今後担う役割

地域住民の方々が安心して暮らすことができるように、訪問診療チームを中心に多職種の連携を強化し在宅医療を充実させる。
本院の後方病院として、医療介護連携を一層強化し、慢性期医療から在宅医療への推進を図る。

④今後の展望

病床の一部を介護医療院に転換することなど、一層の高齢化に対応した体制づくりが必要と考えている。

病院の役割と今後について

病院名：京都ルネス病院

①自施設の現状及び課題

救急搬入が少ない

病床数（30．4．1）

合計	一般					療養			精神	結核	感染症
	小計	うち 回復期リハ	うち 地域包括ケア	うち 障害者施設	うち 緩和ケア	小計	うち 回復期リハ	うち 介護療養			
171	118	24	29								

病床機能（平成29年度報告分）

全体	高度急性期	急性期	回復期	慢性期
171	27	47	69	28

②病病連携、病診連携、医療介護連携等の取組及び課題

特になし

③地域において今後担う役割

地域における唯一の二次救急病院として急性期医療を支えていく

④今後の展望

病院の役割と今後について

病院名： 渡辺病院

①自施設の現状及び課題

他施設への受け入れが少なく、看取る場合が増えている。

病床数(30. 4. 1)

合計	一般					療養			精神	結核	感染症
	小計	うち回復期リハ	うち地域包括ケア	うち障害者施設	うち緩和ケア	小計	うち回復期リハ	うち介護療養			
						96					

病床機能(平成29年度報告分)

全体	高度急性期	急性期	回復期	慢性期
96				96

②病病連携、病診連携、医療介護連携等の取組及び課題

日頃から他病院・医院との患者情報の共有が不可欠である。

③地域において今後担う役割

中丹地域での療養病床を有する医療機関として、急性期医療と在宅医療とを繋ぐ役割を担う一方、家庭の事情により在宅で看護・介護が出来ない場合も実際にはある為、家庭の働き手の確保及び支援の意味から退院→在宅のみだけでなく、人生の終末を看取ることも必要である。

④今後の展望

今後も、現在の療養型病床機能を維持していく。

病院の役割と今後について

病院名：松本病院

①自施設の現状及び課題

一般棟（19床）は休床中、療養棟（57床）のみ稼動している。スタッフの事情等で時間外外来診療は原則として出来ない。

病床数（30．4．1）

合計	一般					療養			精神	結核	感染症
	小計	うち 回復期リハ	うち 地域包括ケア	うち 障害者施設	うち 緩和ケア	小計	うち 回復期リハ	うち 介護療養			
76	19					57		7			

病床機能（平成29年度報告分）

全体	高度急性期	急性期	回復期	慢性期
57				57

②病病連携、病診連携、医療介護連携等の取組及び課題

地域の先生が診ている患者で在宅介護が困難になった場合の受け入れ。
他医療機関の入院患者、他施設の入所患者で小康状態であるが在宅復帰が困難である場合の受け入れ。
中核病院で平素は高度専門医療を必要としない外来患者の受け入れ（外来待ち時間の短縮）。

③地域において今後担う役割

小規模な病院であるが機動力を生かし、地域医療に貢献していきたい。

④今後の展望

休床中の一般棟の再開

病院の役割と今後について

病院名：もみじヶ丘病院

①自施設の現状及び課題

長期入院患者とその家族の高齢化が進み、退院先の問題等により、退院促進が難しい状況にある。
一方、緊急受診、緊急入院等の需要も多く、急性期の患者対応が求められるなど、慢性期と急性期の二極化が起こっている。 又、認知症治療病棟においては、認知症患者（BPSD）の入院依頼が増えており、ベッド管理が難しい状況でもある。
今後、この地域においては、精神科病院の総合的な機能を充実させることが必要であり、急性期治療病棟の機能が求められるが、地域的な問題で医師の採用が困難な状況であり、機能付に大きな影響を与えている。

病床数（30．4．1）

合計	一般					療養			精神	結核	感染症
	小計	うち 回復期リハ	うち 地域包括ケア	うち 障害者施設	うち 緩和ケア	小計	うち 回復期リハ	うち 介護療養			
									380		

病床機能（平成29年度報告分）

全体	高度急性期	急性期	回復期	慢性期

②病病連携、病診連携、医療介護連携等の取組及び課題

地域連携室から高齢者生活支援室を独立させたことで、病院及び診療所、高齢者施設、ケアマネ等々、精神疾患及び高齢者（認知症等）に関する問合せが増加してきた。特に認知症等については、在宅での対応が難しいため、専門的な当院への通院、入院依頼等の件数が増加している。
又、当院の入院患者の救急受診及び他科受診依頼、入院患者（高齢）の施設受け入れ等、病病、病診、医療介護連携等については、当院でもその必要性を強く感じているが、地域包括ケアシステムの構築には、行政も含めた連携の強化がさらに必要と考える。

③地域において今後担う役割

1)精神障害に関する正しい理解の啓発と、困難事例等に対する精神科領域の専門的なサポートとスーパーバイズ。
2)急性期及び認知症患者等における通院及び入院機能の充実と精神障害者の社会復帰の推進。

④今後の展望

精神科領域における急性期機能の充実と認知症患者への専門的な総合支援への取組の強化。又、精神障害者の在宅復帰に向けた新たな施設等の立案検討を行う。